江戸の「亀山の仇討」物狂言考

――南北作品以前――

鵜飼伴子

一　上方から江戸へ

元禄十四年（一七〇一）五月九日、伊勢亀山城下で実際に起こった石井兄弟による敵討事件が、江戸時代の人びとの想像力を刺激し、浮世草子や浄瑠璃、歌舞伎など、数多くの文芸作品を生んだことについて、拙稿『亀山の仇討』物の成立と展開――上方を中心に――[1]では、おもに京都や大坂での動向について言及した。本稿では、上方よりやや遅れて江戸にもたらされた「亀山の仇討」物の文芸作品について整理しつつ、いささかの考察を試みたい。

元禄十五年に刊行された浮世草子『元禄曽我物語』は、奥付に京の書林河勝五郎兵衛と並んで江戸日本橋の升屋五郎右衛門の名が記されており、当然江戸の読者にも読まれていたはずだと思われるのだが、江戸の歌舞伎あるいは浄瑠璃で「亀山の仇討」物の上演記録が見られるのは、実際の事件が起こってから五十年の後になる。

宝暦二年（一七五二）夏、市村座上演の『花鯱亀山通』が、現在知りうるかぎりで最初の江戸における「亀山の仇討」狂言である。番付の所在不明のため『歌舞伎年表』第三巻から役名を拾ってみると、赤堀源五（初代嵐七五郎）、石井民部左衛門（三代目坂田藤十郎）、石井源之助・源之丞（初代中村粂太郎）、石井半蔵（嵐玉柏）、本田の次郎女房（初代中村喜代太郎）である。台帳は現存しないが、宝暦三年正月刊『役者秘事枕』江戸之巻の嵐七五郎の評文に、中村粂太郎（石井源之助役）をなぶり殺しにする赤堀源五役の演技が褒められている。七五郎は大坂で最初に「亀山の仇討」が上演された享保十三年（一七二八）、石井兄弟の弟役を勤め、後に実悪に転じて赤堀親子を演じている。つまりこの狂言は、上方の実悪役者初代嵐七五郎が江戸へ下り、得意の赤堀役を見せるべく仕組まれたものであり、「亀山の仇討」狂言は、上方役者によって江戸にもたらされたのである。あるいは宝暦以前成立かとされる実録

『石井明道士』が、この頃江戸に読者を獲得しつつあり、そのことも「亀山の仇討」物の歌舞伎化に作用したかも知れない。この興行は好評であったにもかかわらず、七五郎一代の芸に終わり、江戸歌舞伎のレパートリーの一つに定着することはなかった。

演劇以外に目を向けると、宝暦二年の歌舞伎公演に触発されたのか、宝暦七年には板元鱗形屋孫兵衛から、黒本『亀山曽我念力岩』(鳥居清満筆)が刊行されている。

織田信長に怪異詮議を命じられながら臆病風に吹かれた剣術の達人赤堀源右衛門は、石井兵助の倅源之丞が十三歳にして妖怪を切り、褒美を拝領したのを妬む。源右衛門は伯父石井宇右衛門に兵術の未熟さを異見され、打ち据えられたのを逆恨みし、帰りを待ち伏せして切りつけ、小石を口に詰め込んで殺す。父を討たれた兵助は、源右衛門が伊豆の三島で眼医者をしている父源内の元に忍ぶと聞き、源内を訪ねて討ち、木戸の柱に書置をして立ち退く。以前宇右衛門に奉公していた江州やおた村の藤六宅に身を寄せるうちに瘧を患った兵助を源右衛門は虚無僧に化けて捜し出し、刺し殺す。源右衛門は水右衛門と改名し、永禄年中の伊勢亀山城主北畠具教に五十人扶持で奉公する。兵助の妻お為が養育した息子たち、兄源之丞は十九歳、弟半次郎は十七歳となり、北畠家中の坂部丹下、林岡左内に志賀助、袖助と名乗って下人奉公する。水右衛門は兄弟が兵助の子供だと知るが、ついに討たれ、世の人はこれを「永禄曽我」と言った。

『石井明道士』の影響かと思われる設定は、石井兄弟が祖父と親を殺した敵を討つこと、兵助が身を寄せている人物の名が藤六(『石井明道士』では金六)であること、袖助という名の下人が登場すること、などが指摘できる。

臆病ゆえに妖怪退治を嫌がり、わずか十三歳の少年に手柄を取られてしまう源右衛門の情けない性格は、『元禄曽我物語』の臆する皆を後目に炬燵に潜り込んだ妖怪(実は手飼いの赤犬)を仕留める剛胆な源右衛門のパロディであり、父親源内の家の長持に身を潜めていたり、山中で枕位牌を取り出し密かに回向する石井兄弟の様子を化け岩の陰から窺うなど、この源右衛門は憎く恐ろしいだけの悪人ではなく、どこかおかしみのある敵役である。実説あるいは先行作品では全く悪意のない人物とされている彼の父親は、ここでは犯罪者である息子を匿い、源右衛門の行方を尋ねて訪れた兵助に対し冷淡な応対をするなど、積極的ではないが悪事に与し、結果、討たれても仕方がないと読者に思わせるような性格に描かれている。父親も息子と同じ犯罪者の一味だとする人物造型は、上方では安永七年(一七七八)の浄瑠璃『道中亀山噺』に至って初めて顕在化する考え方であり、江戸では随分早くから、歌舞伎の敵役が演じる役に見られる親子で悪者の類型に当てはめられていたことが知れる。

宝暦二年上演の『花鰔亀山通』の影響がどの程度あるのかは特定できないが、宇右衛門の口に小石を詰めて殺す場面に「此しうちはまへどうみ丸がぐわんてつのやくて大あたり」と、寛保三年(一七四三)秋、中村座上演『遊君今川状』で二代目松本幸四郎(俳名海丸)が演じた「ぐわん鉄」役の当て込みと思われる文言や、兵助に負わされた額の傷を目立たなくするため、ヘアスタイルを総髪にした水右衛門が鏡を見ながら「今からかほつきをぎよらく

とでよふ」と、当時江戸で人気の実悪役者初代中村助五郎（俳名魚楽）を当て込むなど、江戸歌舞伎界の動向を強く反映していることがうかがえる。

歴史的に、北畠具教が伊勢の守護職にあったのは天文十四年（一五四五）から永禄五年（一五六二）の間であり、織田信長が着々と各地に勢力を拡大しつつあった頃である。時代設定を元禄ではなく、文字の似た永禄としたのは、政治的な理由からか、純粋な虚構化なのか不明であるが、石井宇兵衛が討たれてから兄弟の敵討まで、実録等では二十年以上かかっているのに、本作ではわずか六年間の出来事としたため、兄弟の艱難辛苦は深く書き込まれていない印象を受ける。

ともあれ、この時代の江戸では、舞台以外のメディアで脚色された「亀山の仇討」物が、人々の目に多く触れていたのだと言える。

二　浄瑠璃『往昔模様亀山染』明和七年四月

宝暦二年以降、しばらく江戸歌舞伎で「亀山の仇討」物が上演される事はなかったが、浄瑠璃では明和七年（一七七〇）四月、肥前座で『往昔模様亀山染』（三冬庵自在、玉泉堂ほか作）が上演されている。梗概を次に載せる[3]。

（第一　水右衛門館の段）遠州浜松桃の井家の家臣藤川水右衛門は、主君謀殺を企て、毒薬を調合させた医者牛田卜元に口封じのためその毒を飲ませ、悪事を諫める妻早蕨を切り殺す。

（第二　高塚山館の段）家の執権岩井左内が水右衛門の謀計を暴く。水右衛門は左内を主君と間違えて闇討ちにする。

（第三　岩井館の段）左内の奴袖平は、水右衛門自筆の毒薬調合依頼書を岩井家へ持ち帰る。左内の長男兵助は、家臣の内田文蔵おちか夫婦に留守を頼み、敵討に出発する。

（第四　茶店の段）八ツ橋寺では、代官の鷺山軍太は兵助を慕う歌町に、商人大津屋弥六は歌町の腰元信夫に横恋慕している。兵助は敵を探すため歌町の想いを受けて当地に逗留し、袖平は手がかりを求めて浜松へ向かう。

（第五　矢作の長者館の段）歌町の父矢矧の長者を訪問した巡礼の老人は、信夫と水右衛門の父佐々木丹流であると告白し、自分が身代わりになるので敵討を諦めるよう兵助に嘆願するが、兵助は拒絶する。

（第六　松並木の段・二川色里の段）鳥目を患う兵助は、かつての愛人で今は二川で廓勤めをする袖平の妹半に会いに行き、素性を知らずに途中で道連れとなった水右衛門に騙し討ちにされる。袖平は面目なさに自害する。

（第七　吉良館の段）おちか文蔵夫婦は巫女と供男に化け、赤星満右衛門と変名した水右衛門の取りなしで吉良家へ入り込み、執権鷺山民部から金を騙り取る。

（第八　白あや住まいの段）兵助の後家白綾は、近所の者たちに琴や端唄の指南をして兵助の弟の源之丞と半次郎を養育しながら、色仕掛けで敵の手がかりを追っている。義姉への誤解の解けた兄弟は、文蔵夫婦からの知らせを元に、亀山近辺に潜む水右衛門を追う。

（第九　満右衛門館の段）源之丞は源蔵と名のり、赤星家へ奉公に上がる。満右衛門の娘初花は、恋い慕う源之丞の身代わり

となって父に討たれる。

（第十　民部館の段）民部は館へ連れてきたおなよ（半）と親子の名乗りをし、尋ねてきた岩井兄弟と文蔵に、自分は以前浜松城下の刀職人で左内に恩を受けたため、兄弟に味方するべく図ったことを告白する。悪事の顕れた満右衛門は館を逃れる。

（第十一　敵討の段）岩井兄弟と文蔵は、満右衛門を討ち取る。

第一で毒薬を調合する医者「牛田卜元」は、実録『石井明道士』に登場する、藤田水右衛門の父藤田卜元の名前を借りながら、敵討事件への関与の仕方を大きく変形させたものであり、ほかにも本作には『石井明道士』の影響が随所に見られる。[4] 第四に登場する商人「大津屋弥六」の名は、浮世草子『元禄曽我物語』において、所堀源右衛門が大坂藤の棚で名のっていた変名で、岩井三兄弟の名前（兵助、源之丞、半次郎）も同書と一致する。また第五で水右衛門の父だと名乗る「佐々木丹流」は、巌流島の世界の佐々木巌流を当て込んだものである。宝暦三年（一七五三）七月、中村座上演の歌舞伎『信田世嗣鑑』に、佐々木巌流が盲目の娘をなぶり殺しにする趣向があるが、それは前年の夏、市村座で上演された『花鰔亀山通』の趣向を差し込んだもので、[5] 亀山と巌流島の世界を綯い交ぜる素地は、安永七年の『道中亀山噺』よりも前にすでにあったと見てよい。

本作の特徴は、『元禄曽我物語』の登場人物名を踏襲し、父と兄を殺した敵を成長した兄弟が討つ、という「亀山の仇討」物に共通する筋を持ちながら、物語の根底に御家騒動の枠組みを与え、また水右衛門の性格造型が先行作と全く異なるために、殺人の動機などに大きな変更が施されている点にある。

水右衛門は、主家横領をたくらむ謀反人である。主人の毒殺をたくらみ、口封じのための人殺しや、理解のない妻を殺す事に何の躊躇も抱かない。陰謀を暴露された後、切腹ではなく追放に処した主人への恩も忘れて暗殺を企て、結果的に岩井左内を殺してしまう。左内の長男兵助には顔を知られていないのをいいことに言葉巧みに近づき、信用させた上でなぶり殺しにする。彼の犯罪はすべて私利と私怨によるものであり、同情の余地は全くない。水右衛門は卑怯で憎むべき悪人に描かれ、岩井兄弟とその家来たち善人側との対立構造が明確に打ち出されている。実際の事件では、石井宇右衛門の長子は源五右衛門をおびき出すための方便とはいえ、何の罪もない父親遊閑を殺しており、善悪をはっきりとは割り切れない部分があった。それが本作では、岩井側には一点の非難されるべき過ちも与えられていないのである。これは、武士としてあるいは人間としてのあるべき理想を描く、浄瑠璃の本質によるものだとみてよいだろう。

この作品は、安永二年（一七七三）に座は不明であるが再演され、当時江戸で好評を得ていたことがうかがえる。やや時代は下るが、寛政六年十月、大坂北の新地芝居（竹本岡太夫座）に初演された浄瑠璃『敵討優曇華亀山』（司馬芝叟作）は本作の改作であり、上方への影響も見逃せない。

安永五年九月、江戸歌舞伎の「亀山の仇討」物としては宝暦二年以来二十五年ぶりに市村座で『楓錦亀山通』が上演された。赤堀源吾（二代目坂田半五郎）、関口蔵人・石井右内（四代目松本幸四郎）、石井十蔵（二代目市川八百蔵）、草履取袖助・石井源次郎（四代目岩井半四郎）、蔵人女房あやきぬ（初代中村のしほ）、草履取筆助（初代瀬川雄次郎）といった配役である。この興行は三代目市川海

老蔵(前四代目市川団十郎)が一世一代の名残口上を述べるというので、かなりの大入りであったらしい。台帳が残っていないために詳細は不明であるが、実録『石井明道士』、安永二年に『昔敵討実録』と改題出版された『元禄曽我物語』とともに、『往昔模様亀山染』が何らかの影響を与えているのは想像に難くない。なおこの芝居は天明二年(一七八二)三月、市村座で『紅粉(べにこ)躑躅(つじかめやまぞめ)亀山染』と題し、初演とほぼ同じ赤堀水右衛門(二代目坂田半五郎)、石井右内・大石蔵人(四代目松本幸四郎)、右内娘みやと・石井源之丞(四代目岩井半四郎)、石井半蔵(三代目市川高麗蔵)、蔵人女房さざなみ(四代目芳沢あやめ)ほかで再演されたが、今度は不入りだったらしい。

さらに寛政六年(一七九四)五月、都座(中村座の控櫓)で二代目坂田半五郎十三回忌追善興行として、『花菖蒲文録曽我(はなあやめぶんろくそが)』(狂言作者は松井由輔・鼓川狸助・川竹文次・勝俵蔵ほか)が上演される。辻番付の口上に「当五月節句より初曙後日曽我と仕、亀山敵討ヲ新狂言ニ取組、奉入御覧ニ候。別て申上候は、御馴染御取立の坂田半五郎十三廻忌ニ相当リ候ニ付、為追善、前半五郎御評判ニ預リ候藤川水右衛門の役、新狂言ニ取組相勤申候間、故人杉暁同前御贔屓御取立有て御見物の程、奉願上候」とあり、天明二年に没した二代目坂田半五郎の当たり役の一つを、その弟子で三代目を継いだ半五郎に演じさせようとしたものである。配役は、浅田屋十右衛門(三代目大谷広次)、石井源蔵(二代目坂東三津五郎)、奴袖助(初代大谷徳次)、蔵人女房やどり木(二代目瀬川富三郎)、石井兵衛(山科四郎十郎)、卜庵娘おさよ(二代目瀬川雄次郎)、石井半次郎(初代岩井粂三郎)、祇園町の白人おなよ(三代目佐野川市松)、石井源之丞(六代目市川団十郎)、杉山卜庵(嵐龍蔵)、藤川水右衛門(三代目坂田半五郎)、田辺文蔵(三代目市川八百蔵)、大岸蔵人(三代目沢村宗十郎)、源蔵妻千束・文蔵女房おしづ(三代目瀬川菊之丞)など。写楽の描いた役者絵が数点あることで有名な芝居だが、台帳は伝わらない。絵本番付から内容を推すと、藤川水右衛門は一巻を奪って石井兵衛を殺害、大岸蔵人は石井源蔵と千束の祝言の場に兵衛の死骸を運ばせ、兵衛の最期を語る。杉山卜庵は息子水右衛門の顔に焼き金で痣をつけ勘当する。源蔵は卜庵を討ち、相狙いとなるが、水右衛門に夫婦もろとも返り討ちに遭い、駆けつけた田辺文蔵も太股を切られて蹙となる。苦労の末、石井半次郎と源之丞、文蔵は敵水右衛門を討つ、といった内容であったらしい。絵本番付を見る限りでは、『往昔模様亀山染』の影響はそれほど強くないようである。

三　歌舞伎『傾情吾嬬鑑』天明八年五月

実録『石井明道士』の江戸への浸透ぶりは、天明六年刊の黄表紙『敵討浮木の亀山』(薜蘿館主人作・北尾政美画)が、石井を岩井とするなど固有名詞等に若干の変更を施してはいるものの、人間関係や物語の運びはそっくり『石井明道士』に取材し、見開きに描いた挿し絵の余白に本文を記す黄表紙の体裁に合うよう、簡潔な文章にまとめたものであることからもうかがえる。読者層の広がりという意味では、写本の体裁でのみ伝えられ、やや文体が硬く読みごたえのある長文小説『石井明道士』より、『敵討浮木の亀山』の方が江戸の一般都市民の目に触れる機会も多く、馴染みが深かったかも知れない。

実録の浸透、黄表紙の刊行を受け、江戸歌舞伎において「亀山

の仇討」物の根幹の一つとなる作品が現れる。天明八年四月、中村座初演『傾情吾嬬鑑』（初代桜田治助作）である。[6] 配役は、岩井右内（初代松本小次郎）、本庄助太夫（市川幾蔵）、本庄助市（市川破魔蔵）、岩井源之丞（初代沢村淀五郎）、源之丞妹八重梅（初代中山富三郎）、長兵衛女房おさち・畑右衛門女房おまち（嵐村次郎）、赤堀源吾（三代目坂田半五郎）、白井権八（三代目沢村宗十郎）、男作幡随長兵衛（四代目松本幸四郎）、助太夫下部三五平・箱根の畑右衛門（三代目大谷広次）などで、一見して亀山と権八小紫の世界の綯い交ぜであることが分かる。三代目坂田半五郎は、師二代目坂田半五郎が得意としていた赤堀役を、この時初めて勤めた。

渥美清太郎氏の解説には、『鈴ヶ森』の開祖と云つてもいい点で、頗る重要視すべき狂言である。幡随院長兵衛も白井権八も、以前から舞台に現はれてゐたが、この両人の出会ひが眼目となつたのは、この狂言が初めて、箱根山からいつか鈴ヶ森に変り、江戸の侠客の相と、この時代の警句とを、其まま今日まで伝へて居るのである」とあり、森山重雄氏「亀山仇討狂言の系譜と南北劇」[7]には「この歌舞伎は桜田治助と四世松本幸四郎のコンビによって江戸の世話狂言を大成の域に達せしめた第一作と考えられている。ただ亀山仇討を平井権八物と綯交ぜしている故に、亀山仇討物としては庇を貸して母屋を取られたようなものである。この歌舞伎によって亀山仇討物が平井権八や幡随院長兵衛のような侠客物と綯交ぜされる様式が作られた」とあるように、従来は本作が「亀山の仇討」物と権八小紫物を綯い交ぜた、最初の文芸作品であると考えられていた。しかし、亀山の仇討の話によく似たシチュエーションの平井権八の挿話を嵌め込んだのは、『石井明道士』の方が早い。『傾情吾嬬鑑』が『石井明道士』に想を得て作られたことは、『劇神仙話』の沢村宗十郎に関する記述中に、「石井明道志ニ源之丞カ丸ニ井ノ字ヲ箱根ニテ見咎ラレシ事アル故、淀五郎ヲ源之丞トシ、宗十郎ヲ権八トセシハ両人トモ紋所丸ニいノ字ナリ。笹龍胆ハ妄説ナカラモ小紫カ紋ト云ヒ来リ、訥子カ家ノ替紋ナリ因テ権八ヲ頼朝ノ孫トシテ此紋所ヲ用ヒ、スヘテ此狂言ハ訥子カ紋所ヨリ案シ出シタルナリ」[8]とあることからも明白な事実である。

とはいえ、『石井明道士』をそのまま単純に歌舞伎化したものとはならないところが、治助の作意の妙である。『劇神仙話』には、「所題ノ意ハ実朝ノ治世ナレハ吾妻鑑ト云フ。傾城ト被ラシムルハ小紫ノ貞烈江戸娼妓ノ亀鑑タルヲ以テナリ。今ノ作者ニ論ナシ。京坂ノ作者企及フヘカラス」ともある。従来の「亀山の仇討」物の影響なども合わせて見ていこう。

（一番目三建目　鴨八幡放生会の場）頼家公の時代、近江鴨八幡宮で放生会が行われる八月十五日、江州佐々木家の家臣石井右内は、九州菊池の家臣白井庄左衛門から譲り受けた真妙剣の一巻を息子の権八に渡す約束をする。右内娘八重梅に横恋慕する源吾は本庄助太夫に仕合で負かされ、満座の中で辱しめられる。源吾は権八に親の敵は右内だと吹き込み、また権八と八重梅の不義を暴露するので、右内は権八へ一巻を渡すのを拒む。

（一番目四建目　岩井右内屋敷の場）岩井屋敷で源吾は助太夫と思い込んで右内を殺す。権八は助太夫が右内から盗んだ一巻を奪って殺す。助太夫を迎えにきた奴三五平と息子の助市は、証拠品から敵が権八であると知る。

（一番目五建目　箱根境木の場）雪降る箱根山中の道で出会った三五平と右内息子源之丞は、互いの身の上をかこち合う。駕

籠を乗り換えた際、互いに忘れ物をした権八と幡随院長兵衛は、引き返した境木で襦袢の片袖を交換し合い、江戸での再会を約す。

（一番目大詰　箱根畑村の場）箱根山中畑宿上州屋畑右衛門の女房お町は、旧主の娘八重梅を妹と偽り世話しているが、八重梅は吃りの畑右衛門がかつて絹商人をしていた時の借金五十両を工面するため、吉原に身を売る。畑右衛門は宿を求めた岩井源之丞の紋や年格好がお尋ね者の権八と合致するため訴人するが、旧主権八の身替わりにしようとしたのが女房の主人であったと知って腹を切る。畑右衛門の述懐から自分が大友の一法師頼国の落胤であると知った権八は、父の形見千寿院の一腰を受け取り、畑右衛門の介錯をする。

（二番目序幕　真崎川口屋の場）春、江戸真崎川口屋で寺西閑心は幡随長兵衛の恋人三浦屋の花紫を貰う話をつけようとする。小紫と名乗っている八重梅は、閑心の覆面頭巾を取ろうとして、彼が赤堀源吾だと気づく。長兵衛は閑心らに嫌がらせを受けるが耐え、権八に江戸を立ち退くよう説得し、別れの盃をする。

（二番目大切　吉原仲之町の場・天満屋の場・大雲寺仇討の場）夏の吉原天満屋では、全盛の傾城小紫は、長兵衛に離縁されたお浜を仲居に世話する。小紫を長兵衛・兄源之丞・お浜の兄三五平が訪れる。小紫は自分の客でいつも頭巾を被っている面影大尽が赤堀源吾らしいと兄に告げる。源之丞は大事を盗み聞きした若者を殺す。小紫と権八が部屋で語り合うのを聞き、三五平は権八が討たれる覚悟であるのを知る。小紫と源之丞は逃げた面影大尽の後を追い、三五平はお浜の首を権八の身替わりに立て役人に渡す。大雲寺の前で源之丞と八重梅は源吾を討つ。

二番目序幕と大切で内容が重なるのは、渥美氏の解説に「二番目の序幕と二幕目では、多少筋が重複したり、矛盾したりしてゐる事に気が附く。これは、最初は序幕までゞ打出し、後に吉原から敵討の場を出した時には、序幕は抜いてしまつたので、斯うした結果になつたのだと思はれる」とあるように、上演初日からしばらく経った後、各幕の評判の善し悪しに応じて幕の追加入れ替えを行った江戸歌舞伎の上演システムに関わる問題のようである。

剣術の師岩井右内を殺した赤堀源吾を、右内の子供たちが討つ、「亀山の仇討」物に共通のテーマはそのまま踏襲しながら、『石井明道士』では源之丞主従が敵を狙う旅をしているのと同じ頃の事件として、石井一族の問題とは全く無関係な挿話として入れられていた権八小紫の物語が、本作では右内と権八の父庄左衛門とが剣術の相弟子であったとの関係を作り、小紫（八重梅）を右内の娘にすることにより、両世界が有機的に綯い交ぜられている。

岩井右内が人違いで殺されてしまう趣向は、明和七年の浄瑠璃『往昔模様亀山染』で家老岩井左内が藤川水右衛門に主人と間違えられて闇討ちにされる趣向の影響が考えられる。名前が「右」と「左」の違いだけであるのも、両者の関係を思わせる。ただし、それ以外の点において、直接的な影響は見えない。

赤堀源吾は、右内に娘八重梅との結婚を申し込むが、腕の未熟が心に染まぬと断られる。それならば上使饗応の竹刀打ちの場で、影山一伝流の達人本庄助太夫に打ち勝ったら婿にしてくれと頼むが、助太夫に打ち据えられ、満座の中で恥を掻く。源吾のせりふに「これ皆遺恨の元は、娘をくれぬ右内めゆゑと思へど、差当る敵と云ふは本庄助太夫、彼奴ぶッ放して今の恥辱を、雪ぐより外

の思案もない」とあり、本来、憎しみの第一対象は右内となるはずのところ、仕合で自分を負かした助太夫を当面の敵として殺意を抱くのは、源吾の歪んだ性格を表している。二番目にはいつも頭巾を被っている寺西閑心、あるいは面影大尽として登場、謎めいた雰囲気を醸し出しているものの、幡随長兵衛との男伊達同士の立て引きに眼目が置かれ、権八小紫の世界に完全に飲み込まれた感がある。真妙剣の一巻や千寿院の一腰といった小道具類も、権八にまつわるエピソードの一部分の役割を担うに過ぎず、その宝物をめぐって源吾が行動を起こしたり、石井一族が難儀したりするような場面はない。

本作の最大の特徴は、遺児が長年に渡る艱難辛苦の末に親の敵を討つという曽我物語的要素を、背後にかすかに匂わせる程度にとどめている点にある。この頃までに江戸では毎年正月に曽我狂言を上演することが吉例化しており、この年の中村座は、前年の顔見世興行で隣の桐座が大入りだったあおりを受けてか、正月興行は行われなかったが、本来正月の次の興行を出す時期に本狂言は上演されているため、あえて曽我色を薄くしたのかも知れない。

近江鴨八幡宮で放生会が行われた八月十五日から、江戸大雲寺で源吾が討たれる夏まで、わずか一年間弱の出来事である。冬の箱根境木で源之丞は敵討の免許状を盗まれ、八重梅は世話になっている家来筋の者の借金返済のために自ら吉原の廓勤めを選択するなど、それぞれ苦労はしているが、源之丞は長兵衛の世話で妹と廓で再会、八重梅は苦界の勤めながら権八を情夫に持ち、登場人物たちは、親の敵を討たねばならない悲壮感よりも、現在をいかに生きるかを大切にしているように見える。むしろ悲惨なのは、自分の主人権八のためによかれと思って図った計略が、女房の主人源之丞に罪人として縄をかける結果となり、申し訳のため切腹せざるを得なかった、吃音の畑右衛門である。このキャラクターは、上方・江戸を通じて、これまでの「亀山の仇討」物にはないものである。[9]『石井明道士』の竹部文太夫は、自分がそばに付いていながら、みすみす主人を討たれてしまったことに責任を感じて自害し、主人に対する不忠の罰を自分に与えた。畑右衛門は、自分の主人に対して忠義を尽くすことのみを考えていたため、それが妻と姑と亡き舅の主人に対する義理を欠く結果となり、死を以て言い訳とするよりほかはなかったのである。

このように義理に絡まれた武士の世界の窮屈さを一番目で描く一方、二番目になると、粋で面倒見がよく、権力に媚びない幡随長兵衛の男らしい生き方や、廓勤めはしていても、女の意気地を通す小紫の小気味よい言動など、町人の世界の自由さを謳歌している。そのあたりが桜田治助の作風の一端なのかと思う。この芝居は、幡随長兵衛と白井権八の件を独立させた書き替え狂言を数多生んだが、「亀山の仇討」の世界との綯い交ぜの形では、四代目鶴屋南北作の文化六年（一八〇九）四月初演『霊験曽我籬』まで、再演されなかった。

四　歌舞伎『花菖蒲浮木亀山』文化二年四月

（一）　あらすじ

大坂で安永七（一七七八）年に初演された浄瑠璃『道中亀山噺』の好評を受けて、その書き替え歌舞伎狂言である近松徳叟・奈河七五三助作『敵討千手護助剣』が寛政二年（一七九〇）八月、大坂中

の芝居(浅尾弥太郎座)で初演された。これが江戸へ紹介されたのは、文化二年四月、市村座『花菖蒲浮木亀山』(並木五瓶・村岡幸次・松井幸三作)が初めてである。[10]立作者の並木五瓶は、もともと上方の出身であったが、寛政十二年以後文化五年に没するまで江戸に定住し、上方の人気狂言を江戸風にアレンジしたものなど、数々の名作を残している。本作もその一つである。

配役は、石井兵衛・三木十左衛門(二代目助高屋高助)、石井兵衛妻おらい・女髪結いおせん(二代目小佐川常世)、飾磨多門之助・石井兵助・石井下部関助(初代沢村源之助)、大倉瀬平・道具屋八九郎(嵐新平)、斯波左京之進(市川門三郎)、曽根次太夫(富士川国蔵)、釣鐘弥左衛門・磯田八之丞(初代嵐冠十郎)、奥女中みのを(山下万作)、手代与助・八ツ橋村百姓又四郎(沢村東蔵)、十左衛門妻岡野・さわしなや娘おしづ・又四郎娘おくら(初代瀬川路之助)、石井半次郎(七代目市川団十郎)、多門之助奥方園生の前(松本よね三)、中野藤兵衛・赤堀水右衛門(五代目松本幸四郎)で、五代目幸四郎は、生涯の当り役となる水右衛門役をこの時初めて演じた。

(序幕[11]　勢州磯部大神宮の場)勢州志摩磯辺太神宮に集まった百姓たちが飾間家の代官曽根次太夫に対し一揆を起こす相談をしていると、次太夫がやって来て相家老三木十左衛門を悪しざまに言い、百姓たちに御家横領の一味連判をさせる。

(二幕目　天竜川の場)杜若の盛りの頃、天竜川で舟遊びする兵衛妻おらいは、娘おときと香川半次郎との恋を取り持ち、絡んできた水右衛門たちに香箱を投げて去る。

(三幕目　石井屋敷百物語の場)石井兵衛は、日待ちのため屋敷へ招いた人々に浜松浅山家の家宝伽羅木の観音と、石井家に伝わる鵜の丸の一巻を披露する。遅れて来た水右衛門が声高に話す恋話を聞き、兵衛は妻の不義を疑う。水右衛門は半次郎とおときの不義を暴露すると脅しておらいを口説く。おらいは不義を咎める兵衛に水右衛門から渡された百両を見せ、御用金の盗賊は水右衛門だと告げる。兵衛は妻の貞節を褒めるが、外聞を憚り首を討つ。水右衛門は、おらいの首を突きつけて間男と御用金窃盗を追究する兵衛を仲間たちと共になぶり殺しにし、観音を奪って逃走する。

(四幕目　飾間屋敷出立の場)播州飾間館では、兵衛の娘岡野の夫三木十左衛門が放埒に振る舞っている。飾間多門之助は十左衛門の真意を見抜き、神影流の奥義八方剣の秘術伝授の上で暇をやると言う。十左衛門が鳥羽へ遣わした大蔵瀬平の注進により次太夫の悪事が露見する。岡野を頼って来ていた半次郎と中野藤兵衛は殿の目通りを許され、半次郎はおときの聟となり石井の苗字を名乗ることとなる。この館に居合わせた上使斯波左京之進は、敵討の墨付を与える。十左衛門たちは敵を目指し、東海道へ出発する。

(五幕目　府中質屋の場)駿河府中本町通りの質屋更科屋の養女おしづは、この店に質入れされた伽羅の観音を手に入れるため弥七と名乗り手代奉公に入った石井兵助と恋仲にある。藤兵衛は妻の髪結いおせんと示し合わせ、番頭与助から本物の尊像の在処を聞き出して取り戻し、弥七とおしづを伴い敵討へ出立する。

(六幕目　大井川の場)藤兵衛は眼を病んだ兵助を葛籠に入れて背負い、大井川を渡る。二の瀬で取り残された兵助は、水右衛門に尊像を奪われ、深手を負う。蓮台に乗って川を越す水右

衛門とすれ違った十左衛門は、二の瀬で瀕死の兵助を見つけ、返り討ちにあったと聞いて無念がる。

（七幕目　八ツ橋村の場）杜若盛りの頃、三河の国八ツ橋村の百姓又四郎は、黒川源蔵と変名した水右衛門を二階に匿い、娘おくらが八年前、三木十左衛門との間に身ごもった子供の市松を育てている。この家を訪れ、市松の差添えと太刀筋が水右衛門の授与であると見た十左衛門は、息子を打ち据え、絶縁を宣言する。十左衛門は兵衛と兵助の回向のために焚いた伽羅の煙が二階へたなびくのを見て、敵の居場所を知る。水右衛門の父浜田松軒の家来であった又四郎は、市松の刀で切腹、手に入れた尊像を十左衛門に渡す。十左衛門は足達者の飯田由兵衛に金と尊像を持たせて播磨への早使いを命じ、逸る関助を押さえ、闇に紛れて逃げる水右衛門の足に手裏剣を命中させる。

（大詰　亀山仇討の場）夜中、東海道間の宿へ逃げてきた水右衛門は、薬屋を起こして金創の薬を求める。血汐の跡を追ってきた関助は、十左衛門の待つ勢州亀山城下へ向かう由兵衛と再会する。明け方、駕籠舁きに扮した由兵衛と関助は、一里塚で水右衛門を乗せ、亀山へ向かう。五月二十八日の辰の上刻、十左衛門・岡野・半次郎と検使役の斯波左京之進が待ち構える亀山城下へ、関助と由兵衛が水右衛門を連れてくる。岡野と半次郎は、関助・由兵衛・十左衛門の手助けを得て、水右衛門を討つ。

一見して明らかなように、本作はストーリー展開を浄瑠璃『道中亀山噺』に大きく拠っている。しかしながら浄瑠璃を単に歌舞伎化しただけにとどまらず、様々な書き替えが施されている。以下、主な登場人物の性格造型と舞台の設定の仕方との二点に注目し、その書き替えのさまを見ていくことにする。

（二）石井一族の受難

『道中亀山噺』の石井兵衛の妻お来は、継娘お時の恋を叶えてやりたい気持ち、つまり血のつながらぬ母であるからこそ、実母以上の深い愛情で娘を守ってやりたいとの想いが関心の大部分を占めており、夫が直面している仕事上の困難、すなわち何者かに用金を盗まれた責任を兵衛が問われていることは、彼女にとって二義的な問題にすぎなかった。一方本作のおらいには、志摩での百姓騒動、殿の御用金紛失の落ち度で夫に勘当された義理の息子兵助のことなどを気に掛けていることが知れる台詞がある。彼女は女ながらに男の社会に属する問題を常に意識する開かれたまなざしを持っており、夫の職務である御用金盗賊の詮議に、たいへん積極的に協力する。言い換えれば、浄瑠璃のお来は強い母性の象徴であり、本狂言では武士の妻としての利発さと貞節が強調されている。

兵衛の姉娘岡野の夫、すなわち浄瑠璃の石井源蔵と本作の三木十左衛門では、ともに舅の敵討に協力しようとする気持ちは同じであるが、社会的な立場の違いから、主人に暇をもらうまでのプロセスに差異が生じている。源蔵は神道流剣術指南の腕を持ちながら、御前の立ち合いでわざと負けて満座の中で恥辱を受け、諸国武者修行のためとの名分で暇を取った。なぜならばたとえ盗賊が水右衛門と分かっていても、御用金を盗まれたのは紛れもなく金番の兵衛の落ち度であり、表立って敵討の願いは叶わないから

である。一方、十左衛門は身持ち放埒を装い、わざと殿の勘気を受けようとするが、多門之助は十左衛門の計略をすべて見通している。使いをやって鳥羽の百姓一揆を鎮め、次太夫の謀反を顕わした十左衛門は賢臣だが、それを見抜く眼力を持った多門之助も賢君なのである。『道中亀山噺』が石井家の私的な復讐劇の側面が強いのに対し、『花菖蒲浮木亀山』は、ある家族の私事に過ぎない敵討を、お家全体でバックアップする構造になっているところが大きな違いである。

眼病を患う兵助を水右衛門がなぶり殺しにするのは、浄瑠璃『往昔模様亀山染』の第六で、鳥目の兵助に素性を隠して近づきになった水右衛門が、兵助を信頼させて騙し討ちにする趣向の変形と思われるが、殺害の動機に違いがある。『往昔模様亀山染』の水右衛門は、自分を敵と狙う兵助を生かしておくことは、我が身の生命の危険を意味する、いわば自己防衛のための殺人であった。本作では、水右衛門は伽羅の尊像を奪うため、持ち主である兵助を殺す。命の危機を回避するという意味ももちろんあるだろうが、むしろ活計歓楽の資金源である尊像を手に入れたいとの金銭的欲望から、殺人を起こすのである。当時の現代社会が抱えていた拝金主義的思想が、このような悪人像の造型にまで反映されていると見ることができよう。

（三）百姓又四郎の家族愛と忠義

七幕目の八ツ橋村の場が、『道中亀山噺』第六の書き替えであるのは明白であるが、この家で展開されるドラマの質も、浄瑠璃と本作とでは全く異なっている。森山重雄氏は「ただ『亀山噺』と違う点は、十左衛門が石井父子の供養をし、拝領の連理香を焚くと、その煙が自然と二階の水右衛門の方へ靡いてゆくということが新趣向である。赤堀が伽羅の尊像を盗み取っており、その尊像と同じ伽羅木で作った連理香の煙が自然と尊像の方へ靡いたのである。舞台の小道具が劇の構造の中へ有効にとり組まれることは少ないが、これはすぐれた一例である」と述べ、それ以外の点は人名の変更を除きほぼ同じだと判断した。確かに、表面的なストーリー展開は同じように見える。だが、登場人物たちの心理や行動には、浄瑠璃と歌舞伎の本質に関わる重要な問題が顕在化しており、それに言及しないで両者を同じようなものと見なすことはいかがであろうか。

『道中亀山噺』では、石井源蔵が百姓又四郎の家を訪れた時、すっかり在所者となってしまっていたお蔵は動転して身繕いを始めるが、父又四郎に叱られて、我が身なりを恥じながら挨拶する。源蔵は息子に会いに来たのであって、お蔵の身なりにはほとんど関心を示さない。田舎の生活に染まった姿を恋しい男にさらすのを恥じるお蔵のいじらしい女心は、源蔵の目的の前では完全に無視されている。一方、『花菖蒲浮木亀山』のおくらは、父親にたまには髪を結い化粧をしたらどうかと意見されても気にしなかったが、十左衛門が訪れた時、一度奥へ引っ込んで髪や衣装を綺麗に整えてから、改めて十左衛門と対面する。十左衛門は、最初この家を訪れて化粧気のないおくらに会った時には、それが誰だか分からず、美しく装った彼女を見て初めておくらだと気づく次第である。このような趣向は、役者が演じる歌舞伎ならではの効果的な演出である。また『道中亀山噺』は源蔵と又四郎の会話中心に物語が進行し、お蔵はほとんど発言をしないが、本狂言のおくらは八年

間の恨み言を十左衛門に直接ぶつける。これも、歌舞伎の女形芸の一つでクドキと呼ばれる、自分の思いを切々と述べるしゃべりの芸が用いられているのである。

個別の例を挙げれば切りがないが、又四郎住家の場におけるもっとも大きな変質は、又四郎自身にある。『道中亀山噺』の又四郎は、孫力松がいつの日か石井源蔵の息子として世に出ることを楽しみに、武芸を習わせ、慈しみ育てて来た。故に、かわいい孫を理不尽とも思える仕内で痛めつけ、親子の縁を切ると一方的に告げた源蔵に大して並々ならぬ怒りを覚え、家から叩き出す。しかし二階に匿っていた旧主源八(水右衛門)の口からいきさつを聞き、源蔵の行為の理由を悟った時、又四郎は源八への忠義と、孫の父親に対する義理との間で、身動きがとれなくなってしまう。片意地な又四郎は、源八を裏切ることは出来ないが、孫への愛は黙止しがたく、ついには孫の刀で我が身を刺すことで孫に手柄を挙げさせ、なおかつ自分は旧主を裏切らず、この矛盾を解決する。又四郎は、忠義も義理も家族愛もどれ一つとして疎略にすることの出来ない、不器用な老人なのである。その愚直なまでの生き方が、強い感動を呼ぶ。

一方、本狂言の又四郎は、やはり孫市松をかわいがって育てる優しい祖父であるが、息子に対してつれない十左衛門に対して長々と恨みを述べ、怒り、涙をこらえて渋面をつくる。浄瑠璃の又四郎の頑固一徹さに比べて、こちらは優しく愚痴っぽく情にもろい老人に描かれている。のちに登場する時は水右衛門の着物を着て、赤堀水右衛門と名乗り、市松の刀で腹を切る。旧主への忠義と、娘の夫との間に挟まれての申し訳なのだが、又四郎は水右衛門をかばい、十左衛門への義理を果たして伽羅の尊像を返すために死ぬのであって、孫市松の運命はほとんど問題とされていない。浄瑠璃の方では動機のもっとも大きな部分を占めていた孫への愛情に関しては、全く無視されているのである。又四郎の市松に対する愛情が薄れたと言うつもりはない。『道中亀山噺』では、この後の段と最後の敵討に力松が登場するが、本作では以後市松の登場場面はないという違いがあり、物語における孫の存在の重要性の差が、はからずもこういった形で現れることになったのだろう。

(四) 物語の設定の変更

『道中亀山噺』で兵衛に勘当された息子の兵助が奉公している刀屋の段は、『敵討千手護助剣』ではそっくり抜かれ、代わりに妻と二人の子供に再会した中野藤兵衛の目の前で、役人に下の息子を殺される悲劇と、妻の兄である関守鳥井弥十郎の情けある計らいが描かれる島田新関の場が設けられていたが、本狂言では兵助が手代奉公に入った店に舞台が戻っている。ただし、浄瑠璃の刀屋では、主人宇右衛門は兵助と岡野の信用を得たのち、初めて二人の謎めいた行動が親の敵討のためであったと明かされるのに対し、本作の質屋では娘おしづも手代の与助も、弥七が石井兵助であること、彼が質物の尊像目当てに奉公に来たことを知っている。兵助の目的は、公然の秘密なのである。兵助が何を企んでいるのかが歴然としている以上、観客の興味は、いかにして尊像を取り戻すのか、その方法の工夫に集まる。そこで藤兵衛の策略となるのだが、偽金のやりとりや、おしづと弥七をめぐる恋愛相関図は、いささか茶番めいていて、悲壮感、緊迫感は厳しくない。水右衛門

役の五代目松本幸四郎が、この幕では実直な家臣中野藤兵衛に扮するのが見どころであり、悪対善の対立構図が生む緊迫したドラマがないために、趣向に頼った気味がある。それ故か、この幕は以後再演されることはなかった。

敵討の日付を実説の五月九日ではなく、二十八日としたのは、『石井明道士』の影響もあろうが、明らかに曽我の敵討を重ね合わせている。討手を『道中亀山噺』の五人ではなく、岡野と半次郎の姉弟二人としたのも、曽我兄弟を彷彿とさせるためと思われる。

また、水右衛門が足に傷を負い、十左衛門の家来二人に騙されて駕籠に乗る趣向は、過去の「亀山の仇討」物には見られなかった。また本狂言は、なぜ敵討の場が亀山でなければならないのかについて、十分な説明がなされていないように思われる。実説及び先行作品では、赤堀は亀山城に仕官しているため、討手は彼の居場所へ赴き、彼を討った。本狂言では、石井兵衛と水右衛門は遠州浅山家に、十左衛門は播州飾間家に奉公し、水右衛門は出奔後、三河八ツ橋村に隠れ住み、京都白川の知辺を頼るべく、桑名を目指して偽駕籠に乗る。百姓一揆の争乱が起こった志摩の鳥羽は飾間家の領地であるが、勢州亀山と登場人物との関係は、どこにも言及されていない。本作は初めに敵討は亀山で行われるとの前提があり、最終的に討つ方と討たれる方とがそこへ揃えばいいのであって、合理的な説明は観客にとっても不必要だったようである。ほかにも兵衛が殺されたのは杜若の盛りの五月で、十左衛門が八ツ橋村に来たのは一年後の五月であるが、「思へば今日は、横死めされし舅どの、月は変れど即ち逮夜」との台詞や、「四海にかゝる宝の詮議の、日延べは二百日の日限りも、はや二日と迫る今月今日」など、事件が一年前だとすると計算上日数が整合しないこういう矛盾点についても、歌舞伎の場合は寛容なところがあるようである。討手が待ち構える試合会場に、水右衛門が駕籠に乗って運び込まれる趣向は、城内から歩いて出てくるよりも登場方法が印象深く、役者を目立たせる歌舞伎ならではの演出といえる。

五　結びにかえて

書き替えによって、原作の綿密に計算された人間心理や物語構造に綻びが生じるのは、ある意味仕方のないことである。しかし、大きな変更点や新しく加えられた趣向のみを取り上げ、人物設定やストーリー展開は原作に拠る部分が多いからといって、同じようなものだと無批判に断言することには、慎重になるべきであろう。

ここでは江戸の「亀山の仇討」物の狂言や文芸作品の歴史を眺め、後半では『道中亀山噺』と『花菖蒲浮木亀山』を比較しつつ、両者の微妙なテーマの変化や趣向の相違を検証してみた。書き替え狂言とは、単にストーリー展開や人物設定を原作に借り、新しい趣向を加えたというレベルで論じられるものではない。書き替えることによって、登場人物の心情から物語全体を貫くテーマまで、大きな変更が行われているのである。その変更された部分をていねいにすくい取り、検証していく作業の積み重ねが、狂言作者の作劇法を分析する主要な方法の一つであり、日本近世演劇における独特の手法である書き替えの実体を明らかにする唯一の方法である。そしてその作業の中から、浄瑠璃と歌舞伎の本質的相違や、当時の観客の文芸志向までもが浮き彫りにされてくるので

ある。

〈注〉

〈1〉『千葉大学社会文化科学研究』第七号、二〇〇三年所収。

〈2〉『大東急記念文庫善本叢刊』第四巻(赤本黒本青本集、勉誠社、一九七六年十月)に、影印と中村幸彦氏による解題がある。

〈3〉国立劇場所蔵本に拠った。

〈4〉『石井明道士』の石井家の若党竹部文太夫および草履取袖介が、本作の内田文蔵・奴袖平の造型に影響していると思われる。

〈5〉宝暦四年正月刊の役者評判記『役者懐相性』の中村助五郎(佐々木巌流役)評文に、「第三ばんめがん流を、代官所より人がたをもって尋きびしければ、惣髪をやろうあたまに剃こぼち、人相をかへて盲の姉千鳥を、なぶりごろしにする仕内扨もにく〳〵しいおそろしい仕内かなと、きつう落がまいつた、しかし是は亀山通の趣向をちよと爰へ指こみしは、作者斗文の才覚也」とある。

〈6〉『日本戯曲全集』第十巻(初世桜田治助篇、春陽堂、昭和五年二月)に本文の翻刻と渥美清太郎氏による解説がある。

〈7〉『鶴屋南北　綯交ぜの世界』(三一書房、一九九三年八月)所収。

〈8〉『劇神仙話』頭注に「此狂言トハ天明八年四月中村座ニテ興行ノ傾城吾嬬鑑ヲ指シテ言フ也」とある。なお、三代目沢村宗十郎と初代沢村淀五郎が自分の衣裳や道具類につける沢村家の家紋は「丸にいの字」、替紋は「笹龍胆」で、それが偶然にも石井源之丞の家紋と小紫の紋(妄説らしい)と一致していたところから、狂言作者の桜田治助が『傾城吾嬬鑑』の趣向を案じ出したのである。

〈9〉吃りの男が切腹し、末期に吃りが治る趣向は、例えば元文二年(一七三七)正月大坂豊竹座初演の浄瑠璃『安倍宗任松浦簪』(並木宗輔作)第四の沼太郎、寛保三年(一七四三)十二月、大坂中村十蔵座(大西の芝居)初演の歌舞伎『大門口鎧襲』(並木宗輔・並木栄輔ほか作)の二つ目の奴槌兵衛などに先例がある。

〈10〉『日本戯曲全集』第十九巻(化政期京坂仇討狂言集、渥美清太郎編、春陽堂、一九二八年六月)に翻刻と渥美清太郎氏の解説が収載されている。

〈11〉以下、幕の数え方は役割番付と絵本番付に拠ったため、『日本戯曲全集』本の呼び方とは異なっている。

(うかい　ともこ・千葉大学大学院博士課程修了)